

2023年2月12日
宮崎中部教会創立記念礼拝
牧師 乾元美

詩編 110 : 1～10
使徒言行録 2 : 42～27
「ハレルヤ」

【前奏】

【招詞】 詩編 29 : 2

【祈祷】

【聖書】 詩編 110 : 1～10、使徒言行録 2 : 42～27

【説教】 「ハレルヤ」

<創立記念日>

今日は、この礼拝を創立記念礼拝としてささげます。わたしたちの宮崎中部教会は、今週の2月18日で創立98周年を迎えます。

1925年2月18日に、初代の吉田穰太郎牧師を迎え、旅館の八畳の座敷を借りて、たった7人による礼拝がささげられました。これが、わたしたちの教会としての、一番最初の礼拝であったと言われていています。

それは、小さな小さな群れでした。しかし、それから次々にイエスさまを信じて受洗し、群れに加わる者が与えられていきました。そして、今日の日まで98年もの間、信仰は脈々と受け継がれ、宮崎中部教会は、戦争の時も、災害の時も、疫病の時も、コロナの時も、一回も途絶えることなく、主の日の礼拝を守り、御言葉を語り続けてきたのです。

これは、長い年月の間、宮崎中部教会に連なった小さな一人一人が、祈りをもって、また礼拝を大切に、イエスさまの御業に仕えつつ、今日の日まで守り続けてきた歩みです。

そして、これまでの信仰の先達の、献身、祈り、奉仕の実りとして、今ここにいる一人一人もまた、この群れの礼拝へと招かれ、イエスさまとの出会いを与えられ、信仰を与えられ、この教会にメンバーとして加えられたのです。

ですから、今度はわたしたちが、将来、ここに加えられる新たな人々のために祈り願いつつ、礼拝を大切に守り、御言葉を宣べ伝え、奉仕の業をささげ、この信仰をしっかりと繋いでいきたいと思えます。

<神さまの救いの歴史>

しかし、この教会の歩みは、確かに、この群れに結ばれた、一人一人の祈りと信仰生活によって守られてきたに違いありませんが、何より、その中心となり、先頭に立って働かれたのは、三位一体の父、子、聖霊なる神さまご自身に他なりません。

ある教会の話ですが、自分たちの教会史を作ろうとしたときに、どこから始めるか、ということが議論になりました。

普通は、創立前後の、開拓伝道や、ルーツとなる教派の宣教の歴史などを振り返るところから始めます。しかし、その教会では長老の一人が、ユダヤのベツレヘムのイエスさまのご降誕から、自分たちの教会史を書き始めようとしたのです。

書く分量が大変なことになるので、結局そこまでは出来なかったようですが、その考えは、確かに的を射ています。教会の歴史は、人の業の歴史ではなく、神さまの救いの御業の歴史だからです。自分たちも、その神さまの救いの歴史の中の一部なのだ、と捉えることは、とても大切なセンスです。

でも、そうであるなら、実は、旧約聖書の時代のイスラエルの民の歴史から、自分たちの教会史を始める必要があるかも知れません。神さまの救いの歴史は、すべての人を救うご計画のために、イスラエルの民を選び出されたところから始まっているからです。

今日の詩編 111 編は、まさにそのことが示されていました。

この詩編は、「ハレルヤ」という言葉から始まります。「ハレルヤ」とは、「神をほめたたえよ」という意味のヘブライ語です。これは、神さまに選ばれ、またエジプトから救い出されたイスラエルの民が、神さまを礼拝する時に用いる言葉でした。

神さまは、世のすべての人間を救うご計画のために、イスラエルの民をお選びになりました。最も小さな民でしたが、神さまはこの民をこそ選び、奴隷の家から救い出し、ご自分の救いのご計画を知らされたのです。

そして、神さまの救いのご計画の通りに、約束の通りに、このイスラエルの民の中に、救い主である御子イエスさまが遣わされました。

9 節にはこうありました。「主は御自分の民に贖いを送り／契約をとこしえのものと定められた。御名は畏れ敬うべき聖なる御名。」

そうです、主なる神さまは、救いの御業のために、ご自分の民に贖いを送られました。「贖いを送る」とは、十字架の死によってわたしたちの罪を贖って下さる、神の御子イエスさまが遣わされることを示しています。

そして、遣わされたイエスさまは、神さまのご計画の通りに、ご自分の十字架の死によって、世のすべての人々の罪を贖い、信仰によって、神さまと共に生きる救いの道を拓いて下さったのです。

イスラエルの民が選ばれたのは、その民だけが救われるためではなく、その民を用いて、すべての人のための救いの御業が実現されるために、選ばれたのでした。

ですから、この民に約束されたイエスさまの救いに与ったわたしたちは、当然、このイスラエルの民に歴史にも連なっているのであり、このイスラエルの民が「ハレルヤ」と神を賛美した、その礼拝を受け継ぐ者でもあるのです。

<主は>

さて、イエスさまがイスラエルの民の中から、預言の通りにまことの人となってお生まれになり、十字架に架かり、復活なさり、わたしたちのための救いの御業を成し遂げて下さいました。

そこから、この救いが、いよいよすべての人に、世界のあらゆる地域、そしてあらゆる時代の人々に伝えられていく時代に入ります。それが、教会の歩みの時代です。そして、この救いを宣べ伝えていく歩みは、イエスさまが再び来られる、世の終わりの日まで、続きます。

また、この教会の伝道の歩みも、神さまのご計画によって、神さまが押し進めて下さるものです。

今日読まれた使徒言行録 2：47 の後半には、こうありました。「こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」。

これは、とても重要な文章です。「主は、救われる人々を日々仲間に加え、一つにされた」。この、教会にまつわるすべてのことは、「こうして、主は」とあるように、主なる神さまが、主語なのです。

人々を救って下さるのは、神さまです。教会へ招いて下さるのは、神さまです。礼拝で御言葉を語り、罪人に救いを与え、悔い改めさせて下さるのは、神さまです。信仰を与え、洗礼の思いを与えて下さるのは、神さまです。この教会に、イエスさまを信じる仲間を加え、一つの群れとして造り上げて下さるのは、神さまなのです。

「教会」とは、十字架のついた建物のことではありません。「教会」はギリシア語で「エクレシア」と言いますが、これは「召し集められた者」という意味です。

教会は、神さまが、選び、救い、招いて下さった者たちの群れ、イエスさまの救いの許に召し集められた者たちの群れ、という意味なのです。神さまが招いて下さるから、神さまが救って下さるから、ここにイエスさまを信じる者の群れがある。教会がある。

そうであるなら、ここに教会があること、イエスさまを信じ、神さまに礼拝をささげている群れがあることそのものが、神さまが、生きて働かれていることのしるしです。

わたしたちの存在そのものが、教会が存在していることそのものが、神さまがこの地において、確かに救いの御業を実現して下さったことの、確かな証拠なのです。

<信者の生活>

さて、今日の使徒言行録では、教会が誕生した、はじめの頃の様子が語られています。

十字架に架かって死なれたイエスさまが復活し、天に上げられると、その後に弟子たちに聖霊が降りました。すると弟子たちは、様々な国の人々が理解できる言葉で、神さまのご計画に従って、イエスさまがすべての人間のためになされた救いの御業、十字架と復活の出来事について語り始めたのです。

この御言葉を聞いて、受け入れた多くの人々が、洗礼を受けました。

聖霊は、救いの御言葉を人々に届け、また信仰を与えて下さる神さまなのです。

そして、イエスさまを信じた人々は、今日読まれた使徒言行録 2:42 にあったように、「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心で」した。

これは、まさに今のわたしたちの教会がしていることと全く同じです。

当時から、イエスさまを信じた者たちは、集まって礼拝をしていました。

その中で、「使徒の教え」とは、イエスさまの救いの御言葉を聞くこと。「相互の交わり」とは、救われた者が共に恵みを分かち合って歩むこと。「パンを裂くこと」とは、聖餐に与ること。そして、熱心に祈ること。これが、救われた者たちの群れが行っていたことだったので、つまり、礼拝を中心として、兄弟姉妹が共に歩む生活です。

<一つになって共有する>

そして特に、今日読まれた部分においては、イエスさまに救われた者たちが、一つになっていたことが強調されています。

44 節「信者はみな一つになって」。46 節「そして、毎日ひたすら心を一つにして」。47 節「主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである」。

イエスさまの救いを信じて洗礼を受けるとは、イエスさまと一つに結ばれるということです。そうして、わたしたちは自分の罪をイエスさまの十字架の死によって赦していただき、イエスさまの復活によって、わたしたちは神さまと共に生きる永遠の命をいただきます。

そうであるなら、救われた他の者たちまた、同じイエスさまに一つに結ばれているのですから、結ばれた者同士もまた、互いにイエスさまにあって、一つに結び付けられる、ということになるのです。イエスさまの許で、わたしたちもまた、互いに結ばれ、一体です。

そのことを踏まえると、今日のところに「相互の交わり」という言葉がありましたが、これは救われた者同士が、互いに親しくする、というような単純な意味ではありません。

この「交わり」というのは、分かち合うとか、共有する、という言葉です。

わたしたちは、まず、お一人のイエスさまに共に結ばれ、イエスさまの恵み、イエスさまの体を共有しています。イエスさまの一つの体を、共に分かち合っているのです。

それは、聖餐の場面によく表わされています。今日も行われますけれども、本来、聖餐においては、一つのパンを裂いて、それをみんなで分けて、いただくのです。

それは、わたしたちが、お一人のイエスさまの恵みに、共に与っているということ。一つのイエスさまの体を、分け合って、生かされているということの「しるし」です。

そのように、命の源を分け合っているほどの、深い関係にあることが、「相互の交わり」ということなのです。

ですから、相互の交わりにある者どうしは、イエスさまの一つの体において共に生きているのですから、あらゆるものを共有して、分かち合って、生きるものとされるのです。

それぞれに与えられている能力や、賜物、恵み、富は、全体のために用いるようにと与えられたものです。右手が、右手のためだけにしか働かない、などということはありません。

また、それぞれが負った痛みや苦しみも、一つの体であるなら、共にその痛みを感じ、負担を担い合うはずで、足が痛ければ、その痛みは体全体が共に感じて、手当をしたり、その足を庇ったりするのです。

わたしたちの教会もまた、恵みも、賜物も、また苦しみや、困難も、一つの体として、分かち合い、担い合い、共有し合って、共に歩いていくことへと招かれています。

そして、そのわたしたちの頭は、イエスさまであり、この方の御心、この方のなさろうとすることに向かって、わたしたちは歩いていくのです。

<救いの恵みを証しする群れ>

このようなキリスト者たちの群れに対して、43 節には「すべての人に恐れが生じた」と語られています。それは、この群れが何だか怖い、とかではなくて、この世にはないような人々の関係や、あらゆる分け隔てを超えた一致がそこにあって、畏敬の念を抱くような思いだった、ということでしょう。

また 47 節には、このキリスト者の群れが「民衆全体から好意を寄せられた」とあります。

イエスさまに救われた人々には、その救いの恵みが、救われた喜びが、互いに助け合い、分かち合い、一つになって共に歩むこととして、具体的な生活に現わされていました。

そして、その群れは、いつも心一つにして、礼拝をささげ、神さまをほめたたえ、感謝し、喜びに満ちている群れでした。

それは、周りの人々から見ても、好ましいものだったということです。

それは、とても大切なことだったと思います。そこから、この群れに加わりたい、この群れの喜びの秘密を知りたい、そう思って、礼拝に参加する者があつたかも知れません。

もし厳しい顔をしていたり、疲れた顔をしている群れだったら、そうは思えないでしょう。イエスさまを信じる群れには、御言葉による本当の喜びと、慰めがあるはずで、

そうして、主は救われる人々を、この群れの仲間へと、日々加えていかれたのです。

そして今、わたしたちもまた、時を超えて、場所も超えて、しかしこの同じ喜びの群れ、イエスさまに一つに結ばれた群れに、主によって加えられたのです。そして、使徒言行録に記されている、この礼拝、この聖餐、この賛美、この祈り、この相互の交わりに、わたしたちも共に加えられ、この教会の歴史の続きを、今、歩んでいるところなのです。

今、わたしたちは、ここにある自分たちだけに目を留めるなら、その小ささや、力のなさ、先行きの不安などを思うばかりかも知れません。

しかし、わたしたちの教会の歩みは、旧約聖書の時代の神さまの救いのご計画から、イエスさまが救いを実現して下さり、聖霊の導きによって歩み、そして救いの完成に至るまで、神さまが愛と憐みの眼差しをもって、生きて働いて下さる、その救いの大きな歴史の只中に置かれているのです。

わたしたちは、これからまた「主が」新しく救われる人々を加えて下さる、その御業に用いられることを願いつつ、「ハレルヤ」と神さまをほめたたえて礼拝し、聖餐に与り、恵みを分かち合い、心をつにして、喜びに満ちている群れでありたいと祈り願います。

【お祈り】

天の父なる神さま ハレルヤ、御名をほめたたえます。

宮崎中部教会の歩み、宮崎の地における、イエスさまを信じ、召し集められた者たちの歩みを、98年もの間、祝福し、守り、導いてきて下さったことを、心から感謝いたします。

わたしたちの歩みのすべては、始まる前から、終わりの後に至るまで、神さまの力強い恵みの御手の中に置かれていることを覚えます。

どうかこれからも、あなたが、救われる人々を招き、聖霊を注ぎ、イエスさまとの出会いを与え、この群れへと加えて下さい。

そのあなたの御業に用いられますように、イエスさまに一つに結ばれたわたしたちの教会の歩みが、神さまの恵みと栄光を現わすものとされますように。

いつも心からの礼拝をささげ、聖餐に与り、いただいた恵みを共有し、困難を分かち合い、心をつにして、イエスさまに従って、歩んでいくことが出来ますように。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 4 1 6 「神の民は」

【信仰告白】 使徒信条

【聖餐】

【讃美歌】 7 2 「まごころもて」

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 2 7 「父、子、聖霊の」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン